

稱讚 二五七号

二〇二四年五月一日発行

慶ばしいかな、心を弘誓の仏地に樹て念を難思の法海に流す。深く如来の矜哀を知りて、まことに師教の恩厚を仰ぐ。慶喜いよいよ至り、至孝いよいよ重し。これによりて、真宗の詮を鈔し、浄土の要を撫ふ。ただ仏恩の深きことを念うて、人倫の嘲りを恥ぢず。もしこの書を見聞せんもの、信順を因とし、疑謗を縁として、信樂を願力に彰し、妙果を安養に顕さんと。

(『教行信証』後序)

安達さん・早崎さん・姉・鳥本さん・住職・鳥本さん・高橋さん・山下さんの八名で参拝



発行 浄土真宗本願寺派 稱讚寺
〒112-0075
東京都足立区一ツ家三丁目五番二〇号
TEL 〇三―五二四二―二〇二五
FAX 〇三―五二四二―二〇二六
HP shousanji.com

二〇二四年度 稱讚寺門信徒会費
年会費 六千円
振込先 城北信用金庫 一ツ家支店
名義 浄土真宗本願寺派 稱讚寺教会
代表 北村 信也
口座 普通 6176051

去る四月二十七日(土)に築地本願寺親鸞聖人御誕生八百五十年・立教開宗八百年慶讃・逮夜法要のご縁を頂きました。二十六日(金)から二十九日(月)六座の法要の中、参集しやすい日時を選んでみました。三月下旬が申込の期限でありましたので、のんびりしていたら、三月中旬頃、この二十七日の逮夜法要は既に五百名の参拝申込があるとお話しを聞き、ぎりぎり滑り込んだことでありました。直前まで九名の団体参拝(とは言っても現地集合現地解散)予定でしたが、お一人体調不良でお休みになりました。二十六日・二十七日は、即如前ご門主さまのご出座であり、二十八日・二十九日は専如ご門主さまのご出座でありました。住職は、二十九日のご満座法要に結衆として内陣出勤させていただきました。鳥本さんご夫妻は、はじめて、このようながご法要のご縁に大変喜ばれておられたのが印象的でした。前門さまのご法話の中で、お念仏の声が高らかにならんことを願っておられるようなお話があったのですが、本堂のテレビの下には「混雑時には、大きな声でおつとめしないてください」の張り紙が目につきました。

築地本願寺

親鸞聖人御誕生八五〇年

立教開宗八〇〇年 慶讃法要

稱讃寺 団体参拝



「法要前に「蓮華殿」でお斎弁当を頂きました。

岡亮二先生は、『親鸞聖人のみ教え』の中で親鸞聖人のお誕生の意義について次のように述べておられます。「人間とは究極的に、煩惱具足の凡夫でしかないということです。されば私たちはこの一点を、常に慚愧の眼で見つめることが、必要になります。自らの正しさに覚悟している自分に、恥じらいの心を持つことが求められるのです。凡夫であれば確固不動の清浄真実の心は、作りえないというべきでしょう。たとえ一時的に無の心を作りえても、命を脅かす不慮の出来事が起れば、その静寂さは一瞬に消え去り、心は動転します。されば私たちは、究極的に死の不安は消えませんが、たとえ迷信にすがりついても、何の効果も現れません。だからこそ、この私を無条件で救う仏がましますのです。真如の動くすがた、南無阿彌陀仏がそれですが、衆生の迷いの真実と、その衆生を救う仏の真実が、親鸞聖人によって明らかにされたのです。ここに親鸞聖人誕生の意義があると、私はみたいのです。」(平成四年四月『宗教』)

これは、お釈迦さまが、この世にお出でになられたわけが、阿彌陀さまのご本願を示すためであった(如来所為興出世 唯説阿彌陀本願海)ことに連ねて述べられておられます。お釈迦さまを「如来」と表現されるように、親鸞聖人を「親鸞聖人」とならしめているのは、「南無阿彌陀仏」のお念仏の真意を今にお伝えくださっておられるからであります。そこに、単なる誕生ではなく、「降誕」の意義があるのでしよう。

そういうことから、お念仏を広く後々まで伝えてくださったことを思えば、その抛り所となるのは、『教行信証』作製がもとになります。

『教行信証』が書かれたのが、五十二歳頃と言われており、真宗教団では、それを「立教開宗」として参りました。親鸞聖人ご自身は、全く自身で浄土真宗という教えを開いたとは思ってもおられません。『正信偈』には、「本師源空は、仏教にあきらかにして、善悪の凡夫人を憐愍せしむ。真宗の教証、片州に興す。選択本願悪世に弘む。」また、『高僧和讃(源空讃)』でも「智慧光のちからより本師源空あらはれて 浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまふ」と謳われています。

それを第三代ご門主覚如上人が『報恩講私記』の中で、親鸞聖人のお徳について三つ挙げておられます。その中に「一つには真宗興行の徳を讃じ」とあります。親鸞聖人ご自身は、師・法然聖人の教えをそのまま継承していると、あらゆるところで述べられておられますが、時が経つにつれ、教団の維持発展のため、他とは異なるところが重視されたのでしよう。実際に、同じく法然聖人を師としていながら、親鸞聖人が受け継がれたお念仏の教えとは違う教団もたくさんありました。

もつと時代が下り、第八代ご門主・蓮如上人から、親鸞聖人を「開山」と呼びびするようになられて、親鸞聖人が浄土真宗という「一宗」を開かれたと言ふことになりました。

現代の私たちにとって、「浄土真宗」という言葉をどう捉えていくべきなのでしょう。

仏教の教えを正しく伝えることの名として心得ておきたいと思うのです。

お釈迦さまがお説きになられてから、二千年以上が立ちました。仏教の教えも、お念仏も遍歴変遷がありました。現在においても、一教団内においても、同じ教団人であっても、捉え方に違いが出ております。それでも、阿彌陀さまは、揺るぎない真のお心のお念仏を届けてくださっておられる。それが「浄土真宗」ではないでしょうか。

「往生と成仏」④

しかし、観無量寿経のお釈迦さまは韋提希の心が解られたのでしよう。韋提希の迷いが解るが故に、出家せよといえない。その迷いの心が解ったということはそもそも何でありましょうか。そこで聖道一成仏の道一を説かないで往生浄土の道というものが説かれてあるのです。それが観経というものであります。ところで観経は、序分はよく解るのに、肝心な本分は定善とか散善とか、いろいろなことがいつてあつて一寸わかりにくいのです。善導大師も相当に苦労されたのでしよう。宗祖聖人も、何かという順序がでてきます。「然れば則ち浄邦縁熟して調達闍世をして逆害を興ぜしめ、浄業機彰れて、釈迦韋提をして安養を選ばしめたまへり」と序分のところは出てくるが、定善とか散善とかいうものは何であるかということではできていない。しかし観無量寿経であつて、観は想であります。想観という言葉が観経に縷々ですが、想い観る、ゆめみる世界、韋提希夫人の如き悩みの内にあるもの、凡夫の夢みる世界、想像する世界、こういうようなものとして浄土が説かれてあるのであります。

浄土とは凡夫の夢見る世界であるということに何か意味があるのでないでしょうか。

長い間こういうことを思っていたのですが近頃案外なところに、想像とかイメージとか人間生活において、どれだけ重要なことであるかということ案外なところで知らしてもらいました。それは科学の一つ、而も自然科学です。

素粒子だの、原子力がどうのと、ああいう科学者が、とにかく科学は知識だけでは駄目で、イメージションが大事だという。本当の科学の世界において、万物のあり方を明らかにしようとするならば、それは知識で掴むというより、イメージで探るといことが、もっと重要であり、そのイメージのみが、別の次元に入りこむ、知識はいくら重ねても別な次元には入れぬ、別な次元の中に首を出すのはイメージだけだといっているのです。我々からいえば、自然科学などは、別の世界だの、超越の世界だの考えないように思うけれども、物極まれば通ずるか、面白いことをいいます。だから、だんだん宇宙を研究してみると、無から有を生ずるといことも承認しなければならなくなりません。我々の知っている宇宙はプラスの宇宙であるが、マイナスの宇宙というものがなくてはならない、というようなことをいって、別な次元に入らなければ、本当のことはわからないといっています。このようなことを、むしろ科学者がいうことは非常に面白いことと思うているのです。

そうすると夢みる世界というものが、我等ははつきりと、うつつの眼でみることはできないが、ほのかにゆめみなければならぬ。うつつの悩みを救うのは夢であり、夢のみが浄土を想像するんです。想像で結構です。その想像する世界を思慕し、欣求してゆくところに凡夫心というものがあつて、聖者や賢人には、こういう想像というものには重んじられないのです。聖道門の人は学者であるから、想像の世界というものは軽んずるんで、しかし、想像の世界でなければ救われない

というところに、凡夫ごろころというところがあるのではないか。

一体死んだ人は無くなったのだと、死んだものは無くなったのだと思うことができずでしょうか。どこかにおるんだと、想い出すと、想い出の内にはあらわれてくるでしょう。その思いつく世界というものを探つてゆこうというところに、そこに観無量寿経の、善導大師が苦勞して解釈された、定善観とか散善観とかの意味があるのであります。とにかくお経の名前が「想観経」であることによつて、知識の及ばないところの、他界であるが如くにして、実はそれを手がかりとして、超越の世界に向かつていから、想像なら、想像の彼方にあるものが無くては想像はできない。いくら想像しても想像の及ばないところに、そこに想像の意義があるのです。それを想像でとどめてしまえば、ただ方便身でしょう。それは人間の想像によつて、その想像からあらわれた仏なるが故に、想像でとめてしまえば方便身であります。しかし想像は、想像に止まることを許さないのが想像であつて、それはすなわち、想像の彼方なるものがあつて、はじめて想像が成り立つのであります。想像の彼方なるものが超越の世界であります。だから別の世界、他界を願うような心を機縁として、超越の世界へと向かうのです。しかし想像するということは想像を超える世界があるといふことを意味していることにおいて、それが即ち超越の世界へと向かうものであり、想像を媒介としてわれわれは超越の世界へ入るのであります。こういうところに観経の意義があるのでなかろうかと思うのです。

このように、浄土のありかたはあくまで超越の世界であつて、この世を浄土にするのだとか、本来この世は浄土であるとかいうことでなくして、想像を通して、より高き次元の世界、すなわち超越の世界というものを見るのであります。それより他に我々が浄土を受け取る道はないのではないのでしょうか。そうすれば、曇鸞大師の論註を読んでも、あるいは教行信証を読んでも、観経を媒介して、大無量寿経の世界に入るといふことがわかるのであります。そこで、どうして凡夫にとつて、浄土がそれほど思慕されるものであるかというところに、眞宗の人間観があるのでしょうか。

先程いい残したことをここでいいそえるのですが、法然上人が聖道門をすてて浄土門に帰入せられたというところは、成仏の望みをすてて、往生一つを願うところに仏法を認められたのであると了解できぬものでしょうか。

往生は易く、成仏は難しいということ、往生してから修行して成仏するのだというような気持ち、法然上人のどこかにあつたかも知れぬが、それは、いわゆる歴史的の視野においてはそういうことが残っているには違いないが、しかし法然上人がそういうことをいわれた心を探してみると、結局は成仏よりは往生、成仏を断念したところに往生を願われたのであるといつてよいのでしょうか。

それがある意味で思いあわすものに二種深信があります。「一つには決定して深く自身は現に是れ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離之縁あることなし」と、ここでいう無有出離之縁ということが成仏道でありましょう。だから機の深信は、成仏に対す

る断念であります。成仏は見込みがない、なにしろ無有出離之縁であるからと、どうして無有出離之縁であるかというところ、曠劫已来常没常流転するからであります。それは何故かというところ、現に罪悪生死の凡夫であるからであります。現実の事実はどうすることもできないので、問題はいつでも「いま現に」である。いま現にここにあるものは、煩惱具足の凡夫であり、罪悪生死の凡夫であります。曠劫已来常没常流転の身、そうならしめられたものであり、従つて無有出離です。成仏は断念しなければならぬ人間なのであります。その人間が「二つには彼の阿弥陀仏の四十八願は衆生を摂受して、疑無く、慮りなく彼の願力に乗じて定んで往生できるところを得」るのであります。ここに衆生が

要するに、機の深信は個人の問題であります。自分自身の問題であります。自分自身の問題として考える時は出離之縁がないのであります。けれどもその出離之縁の無いものにも、助かる道があるとすれば、衆生を摂受する道であります。生きとし生けるものが皆救われるのであります。大悲の本願の上には一人も洩らすことがない。皆本願の浄土に生まれさせたいというのが、仏の本願というものであります。それは一体どういうことであるかといえ、本願が衆生を理解したのであります。迷える衆生はどういうものかを本當にわかつておるところに本願があります。だから本願の方には疑心があるとはいわずに「彼の阿弥陀仏の本願は衆生を摂受して疑いなく」であります。この一切衆生とは私にとつて何であるか。ここに生死解脱という個人の問題の中に人間関係というものが

あり、その人間関係が、成仏よりも往生を思わせるのであります。大体いくら考えてみても助かるのは自分であり、皆を助けたいといつたところで、助けられるかどうかかわからないです。要するに皆を救うなどということは自分の力ではできないのです。唯、仏の本願が、すべての衆生を救うのであります。その衆生すべてが救われたということが、どうして凡夫の喜びとなるのでしょうか。現実には愛と憎しみしかなく、同性相競い、異性相愛す。人間のあり方は、分りにくいものであります。大体わかることは、男女の間に愛欲があらわれ、同性の間に競いがあり、そこに我はよし汝は悪しの怒り、そねみがでてきます。恐ろしみのとれないのが煩惱であります。煩惱具足とは、怒りと欲の心がとれないことです。それがやがて即ち罪悪であるが、しかしそんな我々がどうして仏の本願がわかるのであります。何ら取柄のない私ですが、小さい時つで救われるというのであります。小さい時から聴いていると、それで結構なので、有難いんです。それはそれでよいがしかし、どうして煩惱具足の我々が如来の本願を聞かして頂いて涙を流すのであろうかなあ、どうしてわかるのだらうかな。沢庵にもお通のころにも、わかつてもらいたいものがあるんです。このわかつてもらうといふことは、なるほど煩惱興盛止むを得んなあといふことで、それが慈悲、悲しみであります。

一体我々は煩惱具足の凡夫であることを何故悲しまねばならぬのか。煩惱を肯定してもよいではないか。人間に欲の心がなくなつたらおしまいであり、腹立つことが消滅したら人間の仕

事はなくなるではないか、ともいえるのです。しかるに、何故に凡夫と悲しまねばならないのでしょうか。悲しみとは何か、ということになると、何かそこに煩惱というもののうちにわかるという、少なくとも仏の心には何故に衆生は煩惱を起すのかな、しかしそれも尤もじゃやというお心があるということでもあります。けれども悲しいということは「それも尤もじゃな、けれども宜うはないのだ」というふうなものが、煩惱の性格の上にあるのではないのでしょうか。

あまりいつてみたこともないのですが、煩惱というものが、凡夫の仏性であり、悉有仏性ということとは仏の心からいえることであるということでもあります。従って――

「罪障功德の体となる

こほりとみづのごとくにて

こほりおほきにみづおほし

さはりおほきに徳おほし

また

「無碍光の利益より

威徳広大の信をえて

かならず煩惱のこほりとけ

すなわち菩提のみづとなる」

といわれてあります。そうすると、煩惱は氷であって菩提は水であります。逆にいえば、煩惱は氷れる菩提であります。だから現実的にいえば我々の煩惱には、裏側から申せば確かに道德的なものがあるように思えます。あれではすまぬ。これではすまぬ。あれではあちらに対して義理がすまないとか、あるいはそれではどうもけしからんとかいっているところに、人間の問柄というものがあるのではないのでしょうか。清沢先生は「我が信念」の終りの方に義務と

いうことをいって、義務を並べてあります。

社会に対する義務、国家・親・子・善人・悪人・老人・少年各々に対する義務。ああいうふうにみると、四方八方義務だらけであって、その義務をみな自分の責任において荷負わねばならぬとすれば、身動き一つできなくなる。そう言った時に、一切を仏におまかせして、一切の責任を仏に負うて頂いて、他力の明るい生活を送るのだといっておられます。いかにもすつきりとした、哲学の畑から出られた先生の言葉らしいのです。しかし、私共はそういう言葉を使わないが、前述のすむとかすまぬというていのが、難しい言葉を使えば義務ということになるでしょう。そうすると、煩惱とは氷つた道徳なのであります。氷っている道徳であるから、これはどうしも仕方がないのです。

「弥陀智願の広海に

凡夫善悪の心水も

帰入しぬればすなはちに

大悲心とぞ転ずなる」

涅槃のさとりに行くのであり、必ず煩惱の水とけて、菩提の水となさしめるものが、本願の不思議であり、名号の不思議であります。大悲の本願のお心を知らして頂けば、そこに煩惱の氷がとけて菩提の水となるのである、という働きが、氷れる菩提としての煩惱があればこそ、これを了解しておつてくださるのが如来のご本願であります。大悲の本願というのは、この凡夫ごころを了解し、凡夫の立場に立つて凡夫往生せずんば我も仏にならないということであつたのです。こうなつてきた時に、凡夫に非ずんば了解のできないものが、如来大悲の本願というものであつたのではないのでしょうか。

こういたしますと、凡夫にとつては、往生こそ願わしいことでもあります。此の世においては、愛とか憎しみとかいって氷つていますが、本願を信じ念仏を申させて頂けば、それが解けて、浄土においては一如平等の大涅槃の境地に入らせて頂くのであります。有難いことであるなというごころ、その心が翻つて、我々は浄土へ参らせて頂く身であるということになつてくれば、お互いの間にも自ら助けあわねばならぬ世界においてながら、害し合つて相すみませんなあというごころにもなりましょう。害し合つておつたと思つていたことが、案外にも助けあつておることになつていたり、有難いことでありましたなあ。有難いという心持ちも、すみませぬという心持ちも、浄土を願うという――往生させて頂く身であるということにおいてのみあるのです。それが凡夫らしいものでないでしょうか。

だから、極端に申しますと、これは私のひそかなごころですが、往生さえさせて頂けば、成仏はどうでもよいといつてもよい。往生さえすれば成仏しますからというのが私のいつわらない心であります。これは私だけの気持ちではなく、教行信証はそうなつていっているのではないでしょう。往生即成仏であつて、成仏のための往生ではなくて、往生するといつて成仏があるのとして、往生をほかにして成仏ということは考えられないのであります。ここに往生といふことの意義があつて、それが別の世界であるといふことをたよりとしつつ実はより他界超越の世界、必ず超越してそこへ行くことができるという、ここに浄土のありか

があるのであります。

ですから、この世のほかには浄土はないのだという考え方は、現代の知識人のみならず、いわゆる聖道門の教えであつて、テレビ、ラジオ等を聞くと聖道の大家たちが皆いつておられる。

「この世のほかには浄土などない、大乘仏教はこの世を浄土にすることだ」と。いかにもごもつともであつて、否とはいえないのです。聖賢らしい、選ばれたる人、誇りをもっている人はそうであるかも知れません。しかし一歩も煩惱から離れることができぬのが、この世に生をうけた我々人間であります。かかる煩惱具足の人間の救われる道は、ただ往生一つ、それは如来の本願一つであります。

「安樂仏国に生ずるは

畢竟成仏の道路にて

無上の方便なりければ

諸仏浄土をすすめけり」

とあります。宗祖にも、畢竟成仏の道路とありますから、往生を通して成仏するのだというふうにもいつておられるわけですが、しかしながら、

「七宝講堂道場樹

方便化身の浄土なり

十方衆生きはもなし

講堂道場礼すべし」

といつて、浄土へ行って修行して証りをひらくというようなことは、方便化身の浄土であるとして、浄土へ行くと、ものは顛倒して、聖者の願わゆる浄土はむしろ方便であつて、眞実の報土は往生即成仏、往生のほかに成仏を求めないというところに、撰述の第十八願の心もあり、二種因果の心もあるのであろうかと思つ

のであります。

浄土眞宗の人は自分のことだけ考えて、社会のことを考えないと、よくいわれるのでありますが、私はそうでないように思ひます。社会のことも、自分のこととして考えるのだということがいえると思ひます。むしろ、社会の問題を社会の問題として解こうとしないで、社会の問題を自分の問題とすると、自分だけ救われて世の中の人が救われないなどという教えに我々は親しむことはできないのです。皆の救われる道―この意味において、愛したり憎んだりして助け合つているのか、害し合つているのかかわらない、その人間が如来の大悲の本願によつて浄土という一つの超越した世界を目指して参らせて頂くのであるという―往生浄土の教えのみが、凡夫の道として開かれたものであるのでしょうか。

その意味において浄土の超越性、感覚の上には他界としてうつることはさげ難いでしょうが、他界として想像された、そのイメージを超えた超越の世界それが浄土であります。「必ず超絶して去ることを得べし」「断といは六種四生の因亡じ果滅して」とある。断・断ち切つて浄土へ行くのであるという、こういう超越の世界であることが、浄土のありかであると思ひます。法然上人の教えを通し、それを人生観内容としての人間像―もちつもたれつの世界は、どうしたところで、皆のたすかる法でなければ、自分が救われないのであるという―その道は、成仏道でなくて往生一つであると、そこに往生道の普遍性が明らかにされたのであります。

しからば往生とはなにか。死んでから後とも

いわれているが、その死後とは何かという問題が残るのであります。それは次章の第三の題目「往生の心」ということで領解を述べたいと思ひます。

金子大榮先生は、「想像とか、イメージというものは、案外、日常生活で重要なことではないか」と仰つておられます。

四、五年前から本願寺で、臨床心理学の「ナラティブ」（語り手自身が紡ぐ物語）を取り上げられた。宗教的とも言えるが、その人その人の救われている実感は物語るのがあるが、私自身は違和感を払うことが出来なかつた。

本来、「ナラティブ」は、臨床心理士がカウンセリングにおいて、クライアント自身に起つた事実を語ってもらい、対処する治療法であると思ひます。

それを宗教的体験（と言っても想像の域を脱していないことの方が多しと思われるが）を語つていこうというのである。

武内紹晃師は『縁起と業』の中で、「外道（仏教以外の教え）のよりどころ」に、「前世に作つた因（宿命論）」「神の思し召し（尊佑造）」「人間死んだらおしまい（唯物論）」を挙げておられる。その中、「宿命論」を仏教の教えとして、私たちは誤解してきたところがあります。また、信仰の自由ではあり、各々が何を信ずるかには自由であり、尊重されなければならぬことではあるのではあるのですが、そこから語られる体験は、生きとし生けるもの全てに通じる普遍的な救いには、どうしても思えないのです。

仏教的な「尊厳」の解釈③

『生死の仏教学「人間の尊厳」とその応用』

木村文輝氏著

では、「そこに自分と同じ人間がいる」とい

う認識をもとにして「人間の尊厳」を考えた場合、その射程はどこまで及ぶであろうか。まず意識をもって生きている人間に対して、社会の許容する範囲内でその人の意思を尊重することが要請される。これは、誰もが自らの意思を尊重されたいとか、主体的な自己を生きたいという思いを抱いている以上、その思いを他者にも適用させることを意味している。しかも、このような態度は自分にとって親しい間柄の人々すなわち「二人称」的な立場の人々のみに向けられるべきものではない。そうした限定を加えることが、先に述べたユダヤ人の虐殺や、無差別爆撃等を許容する姿勢を生み出すのである。反対に、「そこに自分と同じ人間がいる」という思いを、自分とは直接関係のない人々、つまり「三人称」的な立場の人々にまで向けることで、あらゆる人間が共に生きることのできる世界を建設することが可能になる。

また、意識を失って生きている人間や、死にゆく人間に対しても、それに準じた考え方をすることができよう。つまり、彼らが以前に表明していた意思を最大限に尊重することが、そうした人々の主体的な自己を尊重し、その尊厳を現成させることになるのである。さらに、過去に死亡した者に対して、遺された者の心にその面影や記憶が残っている限り、「そこに自分と同じ人間がいる」という思いを抱くこと

は可能である。それだからこそ、遺された者達は故人の遺志を継承し、それを実現するために努力する。また、我が国では法事や墓参、あるいは戦没者や殉教者の慰霊式典の形で、死者の冥福を祈る儀礼が伝統的に行われているのである。

一方、この「人間の尊厳」は、新生児や生まれて来る前の人間にも適用することが可能である。すなわち、新生児や胎児、人間の胚等は、やがて意識をもった人間に成長する可能性をもっている。それ故、こうした存在を前にして「そこに自分と同じ人間」となるはずの存在「そこ」に自分と同じ人間（となるはずの存在）が「そこ」に自分と同じ人間（となるはずの存在）が、我々はそのような場面で、多少の

確かに、人間の胚に対してそのような認識を抱くためには、ある程度の努力を要するかもしれない。だが、我々はそのような場面で、多少の想像力を働かせる必要があるだろう。その必要性を否定する立場は、ユダヤ人の虐殺を可能にした立場、すなわち、自らとは面識のない者達にはいかなる関心をも抱こうとしない立場に連なるものである。また、無脳症児や重度の障がい新生児に関しても同様の指摘が可能である。つまり、呼吸をし、心臓が拍動している人間を前にしながら、その身体上の能力や性質等が自分と異なるという理由で、「そこに自分と同じ人間がいる」ことを認めない態度は、人種の違いを根拠としてユダヤ人を迫害し、精神障害の被害を強行したナチスの姿勢と共通している。

のみならず、そのような子どもを対象として、「そこに自分と同じ人間がいる」ことを認めないことは、その子どもを「わが子」として慈しむ両親の「人間の尊厳」をも否定する行為だと言えよう。

さらに、我々は想像力をたくましくすることによって、遠い将来に生まれてくる子孫に対しても、「そこに自分と同じ人間がいる」という認識をもつことが可能である。反対に、そのような認識を抱かない限り、例えば百年後の地球環境を守る運動を行う意義を見出すことはできない。また、このような意味での「人間の尊厳」を主張することによってこそ、「有縁無縁三界の万霊等に回向する」ことを目指す仏教の立場、すなわち、自らとの直接的な関係の有無に関わらず、過去、現在、未来の三つの世界に存在した、あるいは存在するであろうあらゆる生き物（ここでは人間に限定した方が妥当である）に対して、その幸せを祈る仏教の根本姿勢が意味を持つことになるのである。

だが、その一方で、クローン人間を産生することや、動物の体内で人間の臓器を製造することに対して、我々は「そこに自分と同じ人間の存在を認めることは困難である。それ故に、このような行為は「人間の尊厳」を侵すものとして排除されなければならない。そして、このことが示しているように、「そこに自分と同じ人間がいる」という認識は、あらゆる生き物を「生きとし生けるもの」として等しく認める仏教の中にある。なおも人間のみならず「人間の尊厳」を与える根拠となり得るのである。

※「そこに自分と同じ人間がいる」と、常に思えない私は、「そこに自分を仏にしようとする菩薩さまがいる」とは到底思えないのかもしれない。そこまで思えたら、人間のみの「いのちの尊厳」を超えるのでしょうか。お釈迦さまの教えの真の意味があるのでしょうか。

